

かんしょ実生における栽培法の比較試験

山 川 理・坂 本 敏
(九州農業試験場)

かんしょ種子播栽培において問題となる苗立本数の確保と初期生育の促進を改善するために、ペーパーポットの利用も考えられる。本試験ではかんしょの真性種子を用いて、種子播栽培・ペーパーポット栽培・挿苗栽培による比較試験を行って、ペーパーポットの効果を検討した。

1. 試験方法

真性種子として、1974年に自然交雑した10系統の種子を等量混合した集団 (So) と1975年に So 集団を自然交雑した集団 (Si) を用いた。試験方法は第1表に示した。なおペーパーポット定植時の本葉は早播で3.0枚、晩播で2.0枚となり、早播の生育が1葉令進んでいた。

第1表 試験方法の概要

栽培法	播種期	定植日	掘取日	栽植密度
種子播	5月1日	—	10月18日	70×15cm
ペーパーポット(早播)	4月1日	5月12日	"	"
ペーパーポット(晩播)	4月20日	"	"	"
挿苗	3月31日	5月28日	"	70×30cm

- 注) ① 種子播は1株3粒播で露地に播種
- ② ペーパーポット(日本柑菜製糖規格3号)はガラス室内に設置
- ③ 挿苗は実生を硫酸処理後電熱温床に播種
- ④ 試験区は1.4×3.0mの3区乱塊法

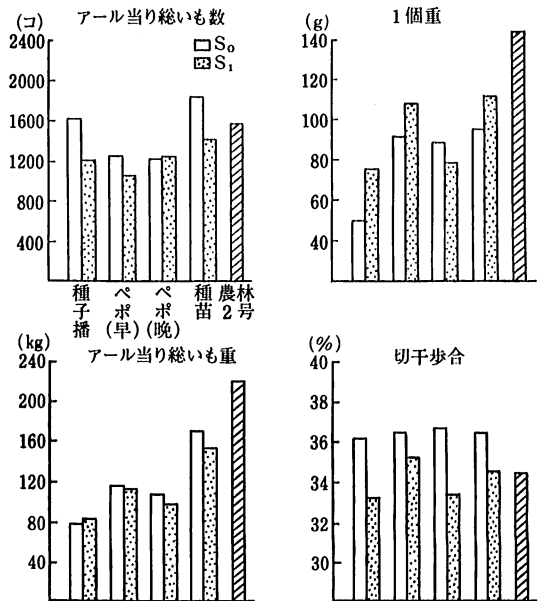
2. 試験結果および考察

発芽歩合はガラス室と電熱温床では80%程度であり、露地ではこれより約10%低かったが、欠株率は3%弱と推測され、したがって本試験の種子播栽培では苗立本数はほぼ確保されたと考えられた。

初期生育として6月29日の莖長をみると、種子播で2.7cm、ペーパーポット(早播)で6.4cm、ペーパーポット(晩播)で5.4cmとなり、ペーパーポットの利用により初期生育は著しく促進した。収量形質の調査成績については第1図に示したように、栽培法による差は、アール当り総いも数では5%水準で有意となり挿苗にくらべペーパーポットの総いも数が少なく、特に早播では種子播より少なかった。1個重は1%水準で有意となり、挿苗

とペーパーポットの早播は同程度であったが、種子播ではかなり小さかった。アール当り総いも重も1%水準で有意となり、ペーパーポットの総いも重は挿苗におよばず、特に晩播では種子播と有意差はなかった。切干歩合については栽培法による差は認められなかった。

以上要するに、ペーパーポットの利用は苗立本数の確保や初期生育の促進に対する効果が著しく、早播すれば1個重は挿苗程度になるが、総いも数が少ないため総いも重がそれほど増加せず、挿苗にはおよばなかった。種子播についてはやはり初期生育が劣り、1個重が小さいために最も低収となったと考えられた。ペーパーポットの早播と晩播では初期生育と1個重については早播がすぐれていたが、総いも数が少なかったため、総いも重には差が認められなかった。



第1図 栽培法と収量形質との関係